

駅とまちをつなぐ新たな「みち」が都市の新しい景観をつくる

御茶ノ水駅
エキュートエディション御茶ノ水



駅改良によって生まれた聖橋口広場。まちと駅舎の結節点として、新しい御茶ノ水の「顔」となった



聖橋口からお茶の水橋口まで一直線でつなぐ



外面と内面の素材を同じにすることで、まちと駅をシームレスにつなぐ「みち」となっている

駅改修計画の歴史と課題

1932年に当地に移転改築された二代目御茶ノ水駅は、駅の近代化を提唱してきた鉄道省工務局建築課の技師、伊藤滋氏の設計によるものである。「都市-駅前広場-改札-階段-プラットホーム-列車」という、流動を前提とした旅客動線が具体化され、長年、都市の通勤駅の模範とされてきた。

こうした設計理念を持つ御茶ノ水駅には、1988年ごろからさまざまな改修計画が検討されては消えた歴史がある。最大の障壁は駅の東西両端は橋、北側は河川、南側は商業ビルが立ち並ぶという立地にあった。さらに敷地のほとんどが「風致地区」と「都市計画公園・緑地区域内」に指定されており、

建築ボリュームに対する規制も厳しい。

計画が動き出したのは2007年のこと。『神田駿河台地域まちづくり協議会』が発足し、周辺まちづくりと一体となった御茶ノ水駅の整備構想の検討が開始されたのだ。加えて、神田川の護岸工事の計画が始まり、その工事に設置する栈橋を駅改良の施工ヤードにも活用することで施工計画の実現化が見出された。こうして念願のプロジェクトは2009年に着手された。

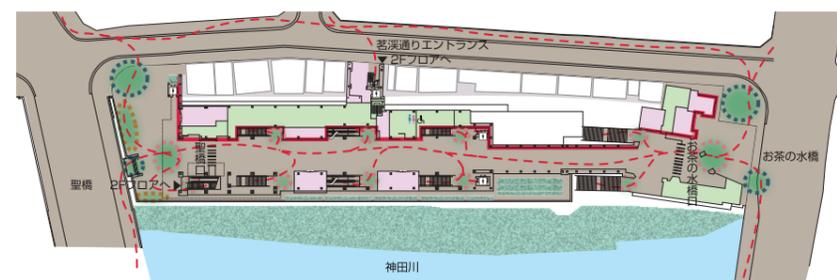
人の流れを風景に溶け込ませる

設計コンセプトは、二代目駅舎の設計思想でもある「流動の理念の具現化」を継承する、「新しい『みち』の創出」だ。まちか

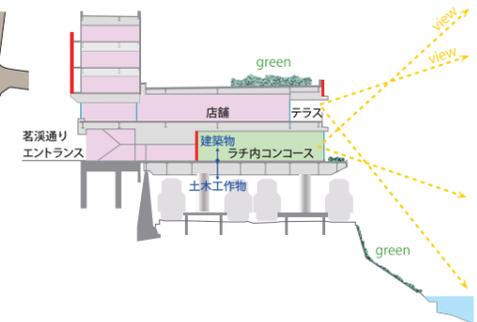
ら駅舎につながる「みち」は、神田川や周辺の景色を望め、季節の移ろいを感じられる場所となっている。

「みち」の一つであるコンコースは、聖橋口からお茶の水橋口までを一直線でつなぎ、視認性を確保した明快な動線を実現した。その上で、駅構内の階段や店舗など、人々の動線が交わる場を交差点と捉えて平面計画を作成した。また、神田川に沿って配置したテラスや、「みち」に面したガラスファサードにより、視点場となる対岸の聖橋やお茶の水橋からは、駅の中の新しい「みち」を行き交う人々の動きやにぎわいが、まちに溶け込む外観として機能する。

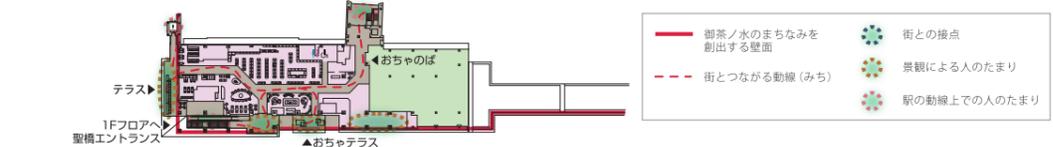
1階（コンコース階）



断面図



2階



- 御茶ノ水のまちなみを創出する壁面
- 街とつながる動線(みち)
- 街との接点
- 景観による人のたまり
- 駅の動線上での人のたまり



外周にテラス(外部空間)を設けたことで、人々の往来やにぎわいが感じられる空間構成となっている

2階店舗エントランス。開放されたテラスが内外をつなぐ

コミュニティスペース「おちゃのぼ」。街歩き地図が掲示され、地域の情報が手に入る

一部の店舗はスケルトン天井とし、通路・店舗・神田川へと続く開放感を演出

2階店舗に人を誘引するよう、店舗エントランスとなる階段室は2階店舗と同じ意匠のタイルを配した



神田川と電車の往来を望むオープンテラスがまちと建物をつなぐ



石調で形が印象的なベンチのある「おちゃテラス」。ベンチは下部の間接照明とも一緒に可動ができる設えにしている

駅舎にできた「みち」を散策するような商業空間

駅改良と併せて開業したのが、商業施設「エキュートエディション御茶ノ水」だ。駅舎にできた新しい「みち」を、好奇心を持ってランブリング(散策、そぞろ歩き)してもらえる空間となるよう、リズムカルな通路デザインに注力している。

例えば2階の共通通路は、あえて曲がり道にして入口から奥までは一気に見通せない配置とする一方、天井をスケルトンにして開放的な空間を演出した。また、駅近隣のニコライ堂や湯島聖堂などの屋根の色、アカデミックな表象から「緑」をイメージカラーとして選び、壁面や床面にバランスよくあしらひ、視覚的なアクセントおよび心理的な誘引としている。散策の小道を演出するために、植栽が通常の商業施設より多いのも特徴だ。

各店舗はガラス面を開放した設計とすることで神田川へ開けた商業空間となり、外部からの店舗の視認性もアップした。テラスには、神田川や周辺の風景を見ながら時間を過ごしてもらえるよう、休憩用のベンチも設けている。

また、オリジナルのタイルや格子の天井

で空間にアクセントをもたらすコミュニティスペース「おちゃのぼ」は、地域の情報発信の場として、駅とまちとのつながりをつくっている。

歴史を引き継ぐ新たな都市景観が誕生

この計画の起点となる、基本設計の着手から17年、改築の構想が始まってからだと40年近い年月を経て、ついに2026年に棧橋の解体や護岸の緑化など全工事が終了する予定である。ホーム自体が狭間で工事ヤードの余裕がなく、さらに夜間作業の制限などもある中で、杭や人工地盤の土木工事との調整や、駅施設の切り替えや仮上家の工事ステップの調整も長い期間を要した。また、お茶の水橋口駅舎は既存の姿を残しつつ、内装は聖橋口駅舎とつながる「みち」として一体的に改修を行い、歴史を引き継ぎ、新たな駅空間を生み出している。

こうして生まれた新駅舎は、「流動の理念の具現化」を受け継ぎながら、バリアフリー化や商業施設との連携といった利便性の向上をもたらした。この地の記憶を次世代に引き継ぎ、新たな都市景観として行き交う人々と新たな時間を歩んでいく。

御茶ノ水駅・エキュートエディション御茶ノ水

所在地	東京都千代田区	〈担当：御茶ノ水駅〉
用途	駅舎・商業施設	統括 木崎裕一
発注者	(御茶ノ水駅) 東日本旅客鉄道 (エキュートエディション御茶ノ水) JR東日本クロスステーション デベロップメントカンパニー	建築 木崎裕一、佐藤菜美、渡部真彰、吉田尚代、川崎香織、菅野航、津村みゆき、原英輔
施工	鹿島・大成JV、東急リニューアル、日本電設工業	構造 江原栄次、笛木大輔、服部信彦 設備 金子敦*、藤村竜馬*、山田大智、松本喜之、荒井啓俊*
敷地面積	4,060.92㎡	サイン C 青城伸太郎
建築面積	2,049.32㎡	工事監理 山田清、芳賀哲雄、篠塚良*
延べ面積	3,104.45㎡	協力事務所 伊藤建築設計工房、東京建築研究所
階数	地上5階	
構造	S造	〈担当：エキュートエディション御茶ノ水〉
開業	(御茶ノ水駅) 2023年12月聖橋口改札供用開始 2026年竣工予定 (エキュートエディション御茶ノ水) 2025年5月	統括 浅川康平 建築 真崎広大 設備 土城峻、今泉菜麻 電気 秋元真喜 工事監理 浅川康平、真崎広大、土城峻、今泉菜麻、秋元真喜 内装デザイン 乃村工務社 (*は元社員)

PROJECTS 御茶ノ水駅・エキュートエディション御茶ノ水

当社HPでも同物件のご紹介をしております。ぜひ、ご覧ください。

